

〔論 文〕

「クリスチャン・ライフの神学」

——在来西洋神学の考察と聖書神学への招き——

日本福音主義神学会
東部部会講演 要旨

蔦 田 公 義

聖句・」ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目指して (*ἐπιτηδεύειν*) 進もうではありませんか。〔ヘブ六〕。

(序) 何故この題目を取り上げるのか。

〔題目の学びの必要性和重要性〕

(講演では、まず「自分とこの題目とのかかわり合い」について、自己紹介的に説明を附したが、ここでは省略する。

但し、この題目は筆者にとって、単なる机上の学び、又は教理的なメンタル・エクササイズではなく、個人信仰のあり方から、福音に仕える者としての生涯と働きの実質に直結した。真面目な意味での「死活問題」的な意味を持ってゐるものなることを一言加えておきたいと思う。

I・H・マーシャル博士は、彼の著書「神の力に護らるるなり」(原題・Kept by the Power of God)の序文で次の様に述べている。「クリスチャン生活の神学ともいうべきものが、新約聖書学者たちによって、大方無視されて来た、と云つても過言ではあるまい。例えば、聖潔(Sanctification)といったような非常に重要な教理題目も、殆ど完全に教会歴史家、または組織神学者にまかされて来ている。」⁽¹⁾

西洋において正に云われている通りのことである一方、筆者の十数年奉仕して来たインドを始めとするアジアの諸国の教会に於いて、さらには日本の教界においての、この無視の実情はさらに明瞭な事実であると云えよう。

日本の教界とクリスチャン・ライフの神学ということを考えて見る時、「聖潔」、「聖化」といった題目に表現される大切な面について、組織神学、歴史神学としては、可成りの輸入を見る。また、輸入されたものの云い直し、焼き直しの類も含めて、扱われて来たものの蓄積も、それぞれの教団教派、また教会の神学体系に従つて多く見られるのはあるが、やはり、それらの殆どは組織神学的に、又は歴史神学的に扱われているものであり、聖書神学的なアプローチはほとんど皆無に近いのではあるまいか。

歴史的にも現在のにも福音主義陣営に於いて「信仰義認」の面は可成り扱われて来ているのではあるが、いわゆる義認、新生後のクリスチャン・ライフの実質についての如何の問題なのである。教会内の平易な表現で云えば「救われて神の子とせられたクリスト者は、その後、地上にての歩みにどうあることが、聖書を通して示される神の御旨なのか」ということなのである。そして、この題目が聖書神学的には見過ごされて来ているという訳である。

この題目の無視は、今に始まったことではない。この題目の見過しから考え得る事のいくつかの点は、遠くさかのぼって、新約聖書の時代にも見得るからである。

クリスチャン・ライフの神学の見過しから生じる第一の点はコリントの教会にも見られるものであるがこれは古今東西を問わず、今日の日本にても見出し得るものである。それは、聖書の示す標準とおよそかけ離れた信仰者と教会の実質である。(参照・Iコリ3:3、5:1以下、6:1以下など)。

第二の点は、福音主義陣営内に見る分派、党派、分裂、さらには敵対心とまで発展するといった結果である。新生、聖化などの「恵みの素晴しさ」の共有を意識する福音主義陣営内にある「神学的ならみ合い」といった不幸な事実を云うのである。ルター以来「信仰義認」が福音主義の一致点であり続けるのであるが、「聖化」の題目が取り上げられるや、それは福音主義の分裂点もしくは、分岐点となると云つた事実を前に「福音主義超教派運動」もこの点は暗黙のうちに相互にふれぬことになっていることがしばしばである。

第三の点は、だからと云つて事に直面せず悪循環をくりかえしている教会に、本来あるべき天的能力の欠如、喪失となつて現われる致命的な結果なのである。聖書の時代から今日に至るまで社会と世あつてのクリスト者個人の力、教会の力は二種類であつた。一つは、内的な力であり、これは誰も後指を差し得ぬ贖罪による心と生活の「きよき」のあかしの力であつた。今一つは外的なものであり、それは伝道と宣教の力、救霊と神の御国の拡張に現われる力であつた。これらの力の欠如、又は喪失を他の事で代用させていることのあらわれが、現今の教会が多く「方策」、「組織」、「制度」などに焦点をあてているのでなければ良いがとの思いもする。「上よりの力」(徒1:8)のみが教会の本

来の能力なのであるが。

さて、クリスチャン・ライフの神学と表現する時、その拡がりの方向を見るならば正に際限なき内容をもつものとなってしまふ。それ故、この小論文ではむしろ内側に焦点をしばり、クリスチャン・ライフの神学の中心点に目をとめることにして論を進め行く訳である。

クリスチャン・ライフの神学の中心点は、やはり、表現されて来た用語としては、聖化論、完全論などとして扱われて来ている主題である。ことに、ウエスレアン・アルミニアン系に於いて用いられていることは、「キリスト者の完全 (Christian Perfection)」はその語自体が大変うがって題目を突いている表現であり、それだけに、この言葉との意味することが「神学論争」の焦点ともなって来ているのを我らは知るのである。また、逆にそれは、この言葉との重要性の表現であることの証しとも取れるのである。

そこで、我々の問題としても、この題目を無視し得ない理由があるので、その二面だけをここに述べつつ論旨を進めて行く事とする。

無視し得ぬ理由の一面は聖書の見地からであり、他の一面は歴史的又は実際的な観点からのものである。

理由の第一は、客観的に聖書を直視する時、聖書に、信仰者、キリスト者の完全 (成熟) なるものが現世的に存在するという事実である。少なくとも次の三つの角度からもそれは認めざるを得ないと云えまいか。誌面の都合上、項目の列記程度となるが、次の点が観察されるのである。

(イ) 聖書はキリスト者を二分している事実。

その分類はある場合には「御霊に属する人」と「肉に属する人」(Iコリ三1、3。参照「生れながらの人間」二

14)、と表現されて居り、他の場合には「成人」と「幼児」の分類(例えばIコリ二6、エペ四14、ヘブ五13、14など)があきらかである。

さらに、聖書が「信仰者」に様々な形で期待している姿を持つという事実の中に、信仰者の現在ある姿と本当はあべき姿との間にへだたりがあり、やはりここでも信仰者の前者的姿と後者的姿の二分が見られると云える。それは、「標準」としてはマタ五17、Iテサ四3、Iペテ二5、9、Iヨハ一7、9などに、「命令」としては、マタ五48、Iペテ一15などに、「祈禱」としてはIテサ五23、24等に、現世的な「可能性」としてはピリ一6 (Yes)、ガラ四19などに各々見る通りである。

(ロ) 聖書に「完全」を認められた人々の実例を見る事実。

旧約時代の人物としては、エノク (創五24) ノア (創六9) アブラハム (Ⅱ歴二〇7、ヤコ二23) モーセ (出三三11) などの他にも例として挙げ得る人物が存在する。新約聖書の中ではルカ一6にザカリヤとその妻エリサベツの二名が述べられている他、ガラ二20のパウロ、さらにはピリ三15に不特定多数の「成人 (新改約脚注は「完全」) である者・皆」が登場する。

(ハ) 聖書にはその他、注目に価する多くの点が存在する事実。

一つの例は、聖書が罪 (単数・sin) と罪々 (複数・sins) の二語を故意に区別して使用している様に見える点が挙げられよう。罪々とも訳せば宜しいのか、複数の sins が用いられる時は、犯された行為の罪が意味されて居り、それに対しては「赦し (forgiveness)」の必要があてがわれているのである。それに対して、単数で罪 (sin) が述べられる時には、一つの力として、或いは生来の性質としての罪、罪性が意味されて居り、その解決としては「きよめ (cleansing)」の必要が提示されているのである。これは聖書を知る者の熟知する所でもあり、説明を加える要は無い

であろう。

今一つの例は、題目に関連した動詞の時制の意識的な使いわけが新約聖書記者たちの筆に明らかに認められる事実である。原則的にギリシャ語時制がその動詞の意味する動作や状態を時の経過の時点に合せた、いわゆる「過去、現在、未来」的な概念に基づいたものではなく、時の「種類」に基づいたものであることは周知の通りである。即ち、ギリシャ語時制は、基本的に継続、又は繰り返しを考えぬ、唯一回だけの事を表わす時制、いかなれば「点的時制」と、今一つの時制、いかなれば、「線（又は幾何学的に云えば、点の連続）的時制」の二種から成るのである。後者は、動作、状態の継続、乃至は繰返しを意味するものである。普通前者はアオリスト時制によって表わされ、後者は現在・過去などを含みつつの進行形時制に表わされる訳である。⁽²⁾

新約聖書の記者たちが、意識的にこれらを使い分けしていることは、例えばイテサ五12以下に「継続時制」を列記して用いている時、五23前半に来るや、何故か、パウロはアオリスト時制に切りかえていることに見られる通りである。新約聖書中の叙述にも命令にも顕著にそれは観察されるのである。アオリスト命令の例はロマ六13b、19、十二1などに見られ、「転機」の要求が明らか意図と見られる。Iヨハ一7などでは、それに対して、期待される信仰生活が一步一步の歩みに表わされる「継続」にあることが明瞭である。

この題目を無視し得ない第二の理由として挙げられることは、歴史を通じ、現在に至る教会の中に、体験を「証し」する人々が存在するという事実である。

それらの中には、勿論客観的な考察に値しないケースも多く見出されて来た。筆者の在印中に、印度東北部に「第三の天派」というのが起り、「キリスト者の完全」を獲得した今は、自らが完全である故、自分のする事に誤りは皆無と主張しナノメの罪を正しナノを誣ることから勇気を奮すに至るまで「罪でも誤りでもなくなってしまう訳である。極端な例であるかも知れないが、考察に値せぬケースは別として、確かに、真面目に取り上げて考察するに値すると見られるケースが存在するのである。個々を挙げて行けば枚挙にいとまがないのであるが、ここでは典型的な一例を引用することで充分目的が果されよう。早期メソジスト運動の代表的な神学者として知られる、ジョン・フレッチャー個人のケースがそれである。

彼については、「彼はキリスト者以上だった。即ち、彼はキリスト御自身のようだった。」と第三者として証言する隣人が居たことが記録に残っているのであるが、彼自身の体験の証詞が一七八一年の集会でのものとして記録されている。⁽³⁾「先週の水曜日の夜、神は私に次の様に語りかけて下さいました。主イエスに由り、あなたは正に罪に対して死んだのだ、そして神に対して生きているのだ、と計算しなさい (reckon)、と。私は、その主の声に従いました。今も従い続けています。神の愛を讀める為に皆様方すべてに証詞致します。私は罪から自由にされています。そうでず。よるこんで明言することが出来るのです。主の恵みの栄光のためにあかし致します。私は罪に対して死に、私の主であり、王であられるイエス・キリストによって、神に対して生きているのです、と。」⁽⁴⁾

さて、これまで述べて来たことを通して、問われるべき質問がまとめられねばならぬ訳であるが、以下の四つの点が挙げられよう。

(1) 新約聖書が標準的とするクリスチャン・ライフとは何か。義とされたクリスチャンに現世において神の期待し給う標準的クリスチャン・ライフとは何か。その時云われる「完全」、「成熟」ということばの意味するところは何か。

である。

今一つの例は、題目に関連した動詞の時制の意識的な使いわけが新約聖書記者たちの筆に明らかに認められる事実である。原則的にギリシャ語時制がその動詞の意味する動作や状態を時の経過の時点に合せた、いわゆる「過去、現在、未来」的な概念に基づいたものではなく、時の「種類」に基づいたものであることは周知の通りである。即ち、ギリシャ語時制は、基本的に継続、又は繰り返しを考へ、唯一回だけの事を表わす時制、いかなれば「点的時制」と、今一つの時制、いかなれば、「線」(又は幾何学的に云えば、点の連続)的時制の二種から成るのである。後者は、動作、状態の継続、乃至は繰返しを意味するものである。普通前者はアオリスト時制によって表わされ、後者は現在・過去などを含みつつの進行形時制に表わされる訳である。⁽²⁾

新約聖書の記者たちが、意識的にこれらを使い分けしていることは、例えばIテサ512以下に「継続時制」を列記して用いている時、五23前半に来るや、何故か、パウロはアオリスト時制に切りかえていることに見られる通りである。新約聖書中の叙述にも命令にも顕著にそれは観察されるのである。アオリスト命令の例はロマ613b、19、十二1などに見られ、「転機」の要求が明らかな意図と見られる。Iヨハ一7などでは、それに対して、期待される信仰生活が一步一步の歩みに表わされる「継続」にあることが明瞭である。

この題目を無視し得ない第二の理由として挙げられることは、歴史を通じ、現在に至る教会の中に、体験を「証し」する人々が存在するという事実である。

それらの中には、勿論客観的な考察に価しないケースも多く見出されて来た。筆者の在印中に、印度東北部に「第三の天派」というのが起り、「キリスト者の完全」を獲得した今は、自らが完全である故、自分のする事に誤りは皆無と主張しだした人々の問題を耳にした。彼らにとって、最早、偽りを語ることから姦淫を犯すに至るまで、罪でも誤りでもなくなってしまう訳である。極端な例であるかも知れないが、考察に価せぬケースは別として、確かに、真面目に取り上げて考察するに価すると見られるケースが存在するのである。個々を挙げて行けば枚挙にいとまがないのであるが、ここでは典型的な一例を引用することで充分目的が果されよう。早期メソジスト運動の代表的な神学者として知られる、ジョン・フレッチャー個人のケースがそれである。

彼については、「彼はキリスト者以上だった。即ち、彼はキリスト御自身のようだった。」⁽²⁾と第三者として証言する隣人が居たことが記録に残っているのであるが、彼自身の体験の証詞が一七八一年の集会でのものとして記録されている。⁽³⁾「先週の水曜日の夜、神は私に次の様に語りかけて下さいました。主イエスに由り、あなたは正に罪に対して死んだのだ、そして神に対して生きているのだ、と計算しなさい (reckon)、と。私は、その主の声に従いました。今も従い続けています。神の愛を讃える為に皆様方すべてに証詞致します。私は罪から自由にされています。そうです。よるこんで明言することが出来るのです。主の恵みの栄光のためにあかし致します。私は罪に対して死に、私の主であり、王であられるイエス・キリストによって、神に対して生きています、と。」⁽⁴⁾

さて、これまで述べて来たことを通して、問われるべき質問がまとめられねばならぬ訳であるが、以下の四つの点が挙げられよう。

(1) 新約聖書が標準的とするクリスチャン・ライフとは何か。義とされたクリスチャンに現世において神の期待し給う標準的クリスチャン・ライフとは何か。その時云われる「完全」、「成熟」ということばの意味するところは何か。

(四) クリスチャン・ライフに、この用語「完全」が何らかの形で適用される時に生じる質問であるが、「獲得又は到達した完全」と「継続する戦い」との関係はどうなるのであろうか。完全ならば戦いはないはずではなからうか。

(イ) この項目は(四)項が肯定される場合に生じるものであるが、その「完全(成熟)」は瞬時的に得られるものなのか、又は継続的に、漸次的に獲得され行くべきものなのか。

(ニ) 不自然な表現ではあるが、「完全」を、現世において「聖潔」、「愛」、「自我の死」といったことに聖書が関連づける場合、その程度は如何、そしてその実生活への適用は如何。

前置きが大切な故に長くなった様であるが、この題目へのアプローチとしては二面的に考えている。第一は、在来西洋神学の考察を行い、次に、我々の問題として聖書神学への招きを述べることにしたい。前者では、まず、肯定論的神学陣営の観点を考察し、次に否定論的神学陣営の観点を考察、次いで、両者間に見る同意点と相異点の整理分析をすることが宜しいと思われるので、その様に論を進めて行く。

(本論) 在来西洋(組織)神学界に於ける「キリスト者の完全」に関する

対立した二大論議の概覧と聖書神学への招き。

I 在来西洋神学の考察

H・E・ジュソップは「キリスト者の完全とは何か、という質問ほどするどく論争され、誤解され、誤って語られた

ものは恐らくないであろう」と述べている。論争の鋭さは、即、この問題の重要性をあらわすものである。なせならば、これこそは個々のキリスト者の毎日の生活の問題であるからである。

組織神学や、神学歴史の再調査、評価、審判のつきつめを行うのではないが、しかし、本題の正しい理解のために、一応西洋における神学的観点の概覧を行い、理解しておくことは必要と思われる。従って、在来の二つの大きな流れの概覧を以下に行っておこう。

A・「キリスト者の完全」の肯定論者の観点

肯定論陣営でこの題目が扱われる時、多種の用語が用いられて来ている。各々、その内容の多面性の一部を意図してのものであるが、H・E・ジュソップやJ・A・ウッドの列記する用語の他にも以下がよく用いられる。⁶⁾「全き愛」、「完全」、「聖化(sanctification)」、「聖潔(holiness)」、「全き救い」、「全き聖潔」、「心の割礼」、「聖霊のバプテスマ」、「祝福の盈満」、「心の清き」、「第二の恵み」、「より高き生涯」、「キリスト者のホーリネス」などがそれである。

用語の問題はここではこれ以上触れることはせずに、すぐに肯定論の観点の概要を大づかみすることとしよう。

肯定論者は、「キリスト者の完全」は消極面と積極面の二面から成るとする。内容的には以下の通りである。

(1) 消極面

(1) 罪からの解放。

肯定論者はキリストの福音は現世に在るキリスト者に完全な神からの解放を与えると主張するのであるが、この点は次の四点から説明が加えられての主張となっている。

①罪の定義がこの論点に於いて重要な鍵とされる。即ち、ここで云われる罪は「知られたる法を意識的に犯すこと」(“a voluntary transgression of a known law”⁽⁷⁾)と云うジョン・ウェスレーのことはに代表される理解において定別されるのである。罪からの解放が云われる時の罪の定義である。②従って、問題の鍵となるものは「動機」であり「意志」である。③さらに「完全」という用語は説明付となる。即ち、「罪」は「あやまち、弱さ、足りなさ」と区別される故に、「罪」からの解放においてキリスト者が完全であり得ても、後者においては完全ではない。故に、これは「キリスト者の完全」であって、いわゆる無罪の完全をいみする神の完全、天使的完全、または、墮落前のアダムの完全と異なる。というのである。

(回) 全き聖潔。

消極面の第二はやはり罪性に関することであり、それは「全き聖潔 (entire sanctification)」というこゝばに表現されるものである。それは何であるか、また何でないのかの二面から説明をまとめ得よう。

①それは何であるか。この陣営で一般的に公認される定義の一つが、R・S・ニコルソンによって提示されている。「全き聖潔とは、それによって神の子が、イエス・キリストに在る信仰を通して全ての生来の罪から清められる」という聖霊の御業である……⁽⁸⁾」それは「生来の罪から心が清められること」であり、さらに、それに由って「心」が「純化され、内的な特色の全てから解放されること」とW・ツァンツは述べている。⁽⁹⁾以上から、まず、その対象は

「心」であること、そして、その内容は「生来の罪の性質」のきよめ (cleansing) であることが解る。ウェスレーはこれも具体的に説明して次の様に云う。「罪 (sin) とは、内的罪の性質とこゝでは理解する。即ち、どんな罪の性質、情慾、愛情、例えばどの程度であってもプライド、わがまま、世を慕う愛、又は肉慾、怒り、おこりっぽさ(気難かしさ)など、キリストの心に合わないどんなものでも、である。⁽¹⁰⁾」罪はこゝでも「あやまち、弱さ、足りなさ」とから区別されている。

②それは何でないか。

一言で云うならば、全き聖潔は罪なき完全 (sinless perfection) ではないと主張されているのである。ところが、肯定論者の立場は今に至るまでしばしば「罪なき完全」を主張するものと受けとめられて来ている。しかし、それにはいくつかの理由が存在すると見られる。その考へうる理由と、その故に生じて来た誤解に対する肯定論陣営の弁明を見ておく必要がある。

(i) 何故「罪なき完全」の主張とみなされようになったのかについては、恐らく次の二つが理由となっている。

第一は、肯定論者の側に属すと云いつつ、現に「罪なき完全」を言った者が居る。⁽¹¹⁾第二は、その陣営において用いられて来たある種の表現や用語がこの誤解を生じたと云えよう。典型的な用語が「根絶 (eradication)」であったために、この陣営では、今日、そのことばは用いないか、用いるにしても可成りの注意深さをもってする様になっていることも一例である。古典的には、ジョンの弟、チャールズ・ウェスレーが作詩した讃美歌の一部に、用語は誤解を招く故との理由でジョンが注告を行った例が記録に残っている。この場合、チャールズは同意して書き直しているのであるが、直す前の二行は次のようなものであった。「然して全ての戦いは止み、今や我に戦いは無し。」⁽¹²⁾ジョンのこの時の意見は「私は今だにこう考えています……神の御子は、人が現世生活を続ける間は、人の内になされた悪魔の

仕事を破壊することはなさらない。彼は肉体的弱さ、病氣、苦痛などを無きものとはされないのだ。」¹¹² というものであった。

(iii) その誤解、非難に対する、肯定論者側の回答に目をとめておくことが公正であろう。誤解と非難に相反して、肯定論者自身の「罪なき完全」に対する否定的態度はむしろ一貫して強く且つ明瞭であり続けている。ジョン・ウェスレー自身、「キリスト者の完全」の中で彼の立場を説明しつつ、強くこのことを述べて

いるのである。「この故に、罪なき完全は、私が決して用いない語句なのである。」¹¹³ この否定は前に述べられた肯定論者の罪の定義にもとづくものであり、その定義に見る罪の理解からすれば、人は、意識と意図をしない失敗や誤りからは逃れられないことを認知してのものなのである。故に「罪なき完全」ではあり得ない。というのが肯定論者の立場なのである。それはアダムの、又は天使的完全のいずれとも異なるもの、それは「罪なき」完全ではないことが明言されているのである。

(2) 積極面

興味深い事であり、且つ意味を持った点でもあるが、これまで述べて来たキリスト者の完全の積極面こそは肯定論者のみの論の基盤ともいうべきものであるのに対して、この積極面は、英国ケジック運動などいわゆるカルビン系の完全論肯定者、支持者の間にも「より深き生涯」、「勝利の生涯」、「聖霊の盈満」その他の表現をもって主張されて来ている、ということである。

ケジック運動を一例として挙げたので、H・F・ステイブンソンのことばを引用しておく。彼は選び出された四十人の説教者の説教集「ケジックの勝利の声」(“Keswick's Triumphant Voice”)の編集者であるが、同書の序

文で次の様に述べている。「この聖会のメッセージは、要する所、キリストの主権とその充ちたる意味に於ける聖霊の内住を通して得られる、個人生活とキリストチャン奉仕の能力に見る勝利のメッセージである訳で……。」¹¹⁴ というものである。

さて、肯定論側の積極面の基本的理解を示すことばは「全き愛」である。全き愛をその内容とすると共に、肯定論側では、その体験、獲得(又は到達)に関しての時と方法に特別な主張を持つのである。以下、この二点に簡単にふれておく。

(1) 基礎概念——「全き愛」

前述、消極面の項で説明されている通り、キリスト者の概念では、キリスト者の完全の動機と意図が以下にみる通り鍵となるのである。

① 鍵となる問題——「意図」と「動機」

ウェスレーの「キリスト者の完全」の要約項目の第一項は、キリスト者の完全とは「意図の純潔」である¹¹⁵ というものである。そこに引用されるウェスレーの説教のしめくりの部分は以下の内容である。

「あなたの靈魂を主に對する全き愛をもって満たしめよ……心の純潔な意図と、あなたの行動の全てに絶えず神の栄光を考慮する心を維持することを努めよ。それは、さうする時に——さうする時までではなく——私たちのなすことと全てが、神の栄光のためになされる様になる故である。」¹¹⁶

人がその思念、言葉、そして行動においてなす全てを判定する規準は、その人の意図と動機なのである。従って、このことは今一つの種類の行為の理解へと我らを導くのである。即ち、純粋な愛の意図をもって行われた行動であっても、神の絶対的な律法を全うするには事欠いてしまう種類の行為である。この種の行為は、知られた法を故意に犯

すことを定義される「罪」とは區別して考えられ、それらは「過誤」と称されるべきこととなるのである。

② その完全と、人間的弱さの余地
以上に述べられて来た意図の理解から、肯定論者は、動機、意図は完全である時にも、その現われにおいて人間的弱さの有ることを認めているのである。

しかし、注目せねばならぬ大切な一点を肯定論者は主張する。それは、肯定論者たちはそのような過誤を、絶対的に聖かつ義なる神の御前にあっての人間の側の責任逃れのための言い訳けとは決してしていかないという点である。ウエスレーは「然し、それ（過誤）は神の義の厳しさを負い切れるものではない。むしろ、それも贖いの血潮を要するものである」と述べている。彼のこの言葉を裏づける五項目は引用に値するものであるが誌面の都合上後半の三項目のみをここに引用しておく。

3 しかしして、それらひとつひとつの過ちは、完全な律法の違反である。故に、
4 贖いの血潮なくしては、それも永遠の刑罰に露呈されねばならぬものである。
5 従って、最も完全なる者といえども、彼らの実際的な違反のためにも間断なきキリストの功を必要としており、彼ら自身のために、またその兄弟たちのために「我らの罪をも赦し給え」と云わねばならないのである。

「しかし、もしカルビン主義者たちが、現代のことばでこの点を強調する議論を述べている。罪は、無知による誤ちも含み、従って人は実際には罪を犯すことから完全な逃避は出来ないもの、とするならば、罪は許されて然るべきものとなってしまう。神は、人が自分で助けようもないことに対して公平な意味で責任を負わすことが出来なくなってしまうのである。それはあたかも両親が、助けようもないほど幼い彼らの赤子が病気になることを責めることが出来ない

いのと同然なのであるから。」

③ その完全と、成長、進歩の無限の余地
全き愛に表現されるキリスト者の完全は、消極面と積極面の両面において無限の成長と進歩の余地を残すものと肯定論者は理解する。

消極面では、その成長は間断なく、古き生き方、習慣、生活のあり方を脱ぎ去り続け、可能な場合は常に同じ過誤を犯すことを止める事により、その人の持つ弱さ、欠点、また古き習慣から脱却成長することに見られる。聖霊の支配に身をゆだねたキリスト者のうちにある全き愛はこのことを為させる促しと、その為に必要な能力を彼に与えるものである。

積極面では、彼は益々主を知る知識と主の恵みに成長していくのである。ウエスレー曰く、「しかし、彼は恵みに、キリストの知識に、神の愛に成長しつづけるのである。」²¹ 然して肯定論者の理解は、絶えずいや増す聖霊の果を伴うキリストに在る品性の積み上げと主の御奉仕のための能力と知恵の面の成長は終りを知らないものがある、というものである。

このようにして、肯定論者は、キリスト者は、カルビン主義者の意味する「罪」にありながら、「完全」であり得ると主張するのである。

(四) 「完全」の獲得に関する説明

肯定論者のこの点についての論は、限られた誌面では到底紹介し切れないし、又、それをする事がこの小論文の目的でもない。但し、聖書的に、教理神学的に、実践的に深く広く論ぜられ続けるものがあることを前提にしつつ、次の三点に簡条的にまとめ得る主張を見るのである。

- ① それは、現世における第二の転機としての瞬時的な獲得であること。
- ② それは、その瞬時経験以後も、キリスト者が一生を通じて継続的に獲得しつづける面をもちものであること。そして、
- ③ 天にて栄化の時に究極的な獲得があること、の三点とされている。

ロベールは、彼のまとめたところによれば信仰者の完全の獲得に関しては古今東西の神学界には四通りの理解があるという。第一は義認の時点で完成するという見解、第二は義認から肉体の死まで継続的に完成に向うとするもの、第三は肉体の死に於いて完成とし、第四は義認に始まり、その後の瞬時経験で獲得、しかし、その後も成長しつづけ、天にて完成するとの理解である。

勿論、肯定論者は第四の立場を取っている。

肯定論の真髓はパーカイザーの次のことばの中に強く表現されている。
「全贖罪の目標は、清き心の体得を可能ならしめることである。

準以下 (Subnormal) であり、このこと以外のものはすべて標準外 (Abnormal) である。これ、そして只これのみが標準的 (Normal) なキリスト教なのである。」

B、「キリスト者の完全」の否定論者の観点

前のしめくくりで肯定論者の提起する強い挑戦を見た我々は、次にこの主題に関する否定論者の観点に目を転ずる

ことにする。まず、否定論者陣営の論の基盤ともいえる、彼らの罪の定義を調べることになる。次いで、彼らの側の完全の概念を検討し、さらに、彼らの考える獲得に関する見地を簡略に見ることとする。誌面の都合で可成り一般化した要約をせねばならぬことは残念であるが、否定論陣営の論は割合しそれがしやすいとも感ぜられることはこの場合幸いである。

(イ) 教理の基盤——罪の定義

肯定論に対する反論は基本的には彼らの、罪、並に神の律法の理解に拠を置いている。サムエル・G・クレイグが、ウォーフィールドの肯定論者の教理に対する「常在の非難」の理由を、彼らの「罪に関する不適当な概念」にあると観察しているのは正しい。否定論者は常に自らを「深遠な罪意識」を持つ者と自称しているのである。J・C・ライル³³のことばなどにもそれは見られる通りである。

ライルが引用する様に、罪の理解・定義の根拠となる中心的な聖句は「ヨハ三・4」と云えよう。ライルは云う。「端的に『罪は』聖書の云うように『律法の蹂躪』なのである。神の啓示された御旨と御性格との完全な数学的平行線から外的にでも内的にでも少しでもはずれることが罪を構成するのであり、その瞬間、それは我らを神の目の前に有罪者となすのである。」

この罪の定義に由れば、神の御旨と律法に完全に合致しない、人のいかなる思念、ことば、行為はすべて罪なのである。従って、消極的にも積極的にも故意の罪を別にしても、とにかく人はその内に罪を持っているのである。この事実、人の動機の誠実さや意図の愛といったものには無関係なことなのである。

最近、パーカーワーが旧新約聖書に於ける「異種の動機と意向の区別」及び、新約聖書中の「無知」のテーマを認知しているという動き程度は認められるものの、否定論陣営のこの理解からは罪と過誤の区別、さらには罪性と罪行

の区別さえもないことが正しいこととなる。肯定論者の区別する、弱さ、足りなさ、誤ちは罪に含まれるのである。従って、この罪の理解に立脚して、否定論者の結論は、いかなる意味合いにおいても、この地上の生涯にある限り、「罪なき完全」は決してあり得ないという主張である。

② 「クリスチャンの完全」の概念。

否定論者が、この世の生涯に於て獲得しうる罪なき完全は無いという立場を取ることを見て来たが、しかし、彼らは現世に於て到達しうる完全の存在を全面的に否定していることはないのである。なぜならば、彼らは以下に引用される様な聖句を確かに受け入れている故である。聖句の例はIコリ七1、ヘブ六1、Iコリ二6、ピリ三15などである。

しかし、彼らにとって、この到達しうる完全とは、究極的、且絶対的完全、即ち、変貌すべき肉体を含め、我らの存在の不完全な要素の完成を末だ含むというものではない、それは相対的完全なのである。その獲得については後述することとして、ここで我らの見ておくべきことは、大別して二つに分類される否定論者の完全の概念である。その二つとは相対的完全と絶対的完全である。

誌面の都合上、多くの学者たちの論を裏付として引用出来ぬことはお赦しを頂いて、否定論者側の二種の完全の理解を箇条書的に要約すると以下のようになるようである。

(i) 相対的完全——学者により見解の相異を見ることではあるが次の三点では一致が見られる。(a)それは地上的完全である。(b)それは肯定論者の云う「消極面（罪性の除去、罪性のきよめ）」は決して含まない。故に「抑圧説」などが生まれて来る理由もここにある。(c)それは成人することへの漸進的な継続と成長そのものであり、内容としては

「キリストの全貌に欠けたる所なく絶えずその御姿に似るべく新しくされていくこと」が霊的に云われ、また実際的には「知識と生活に関係する全ての面の全体的堅実さ、また、教理の全ての点に於ける健全さ」を指すのである。従ってこの陣営ではしばしば *tearings* を「完全」よりも「成熟」と訳すことを妥当とするのである。

(ii) 絶対的完全——学者の見解は異口同音のようである。即ち、(a)それは天に属する完全であり、(b)それは文字通り完璧な完成と完全なのである。ピリ三11、14に見られるパウロの切望した「キリスト・イエスにおいて上に召して下さる神の栄冠（文語訳・褒美）」又、「死者の中からの復活」と同一のものである。

③ 獲得の方法——全く端的に述べる。

- (i) 地上に於いて、漸次的に。
- (ii) 天にて、現世生涯の後に、絶対的に。

C、二者の観点の比較（図A参照）

氷山の一角的な提示であるがこの題目に関する西洋神学の流れにみる二者の立場を各々客観的に見て来た。この学びの目的の為に、正に簡条書的にではあるが、二者の神学的立場の同意する領域と相異する点をまとめると以下の通りとなる。

(イ) 同意点。

① 教理の基礎において。

- (1) 両者は「信仰による義認」がキリスト者の完全の基礎であることに於て同意する。
- (2) 両者は信仰者の内に罪の存在を認める。

「しかし、私は、信者たるものがたった一回の力強い一躍によって、一つの祝福の状態へ、そして全的献身へ、突如的、かつ神秘的に転移するという説を受け入れる訳には行かないのである……回心から献身の突如的、瞬時的な一躍などというものを私は聖書の中に見出すことが出来ないからである。」

引用文2、J・C・ライルの叙述（否定論者の代表）。

「しかし、私は、信者たるものがたった一回の力強い一躍によって、一つの祝福の状態へ、そして全的献身へ、突如的、かつ神秘的に転移するという説を受け入れる訳には行かないのである……回心から献身の突如的、瞬時的な一躍などというものを私は聖書の中に見出すことが出来ないからである。」

引用文1、ジョン・ウェズレーから、サラ・ラッターへの書簡（肯定論陣営の代表）。「漸進的聖化は人が義とされた時から増大をみるものです。しかし、罪からの全き解放はいつも瞬時的であると私は信じます。少なくとも、今まで私は例外を一つも知りません。」

引用文2、J・C・ライルの叙述（否定論者の代表）。

「しかし、私は、信者たるものがたった一回の力強い一躍によって、一つの祝福の状態へ、そして全的献身へ、突如的、かつ神秘的に転移するという説を受け入れる訳には行かないのである……回心から献身の突如的、瞬時的な一躍などというものを私は聖書の中に見出すことが出来ないからである。」

- (1) この世における、全ての罪からの解放、即ち「全ききよめ (cleansing)」が完全の内容の一面としてあるか否かで両者は理解を異にする。
- (2) 転機的な完全への到達といった経験があるか否かの点について両者は理解を異にする。これらの相異点の鋭どさを浮き彫りにするものとして、両者の客観的論議はさておいて、両者からの主観的な注釈を各一つ引用することがよいかも知れぬ。
- (3) 両者は相対的完全は地にて獲得し得るということにおいて見解を同じくする。
- (4) 相異点
- (1) 両者は絶対的完全は天にて与えられるということにおいて一致する。
- (2) 両者は相対的完全は地にて獲得し得るということにおいて見解を同じくする。
- (3) 両者は相対的完全は継続的な成長を含むという理解において同意する。

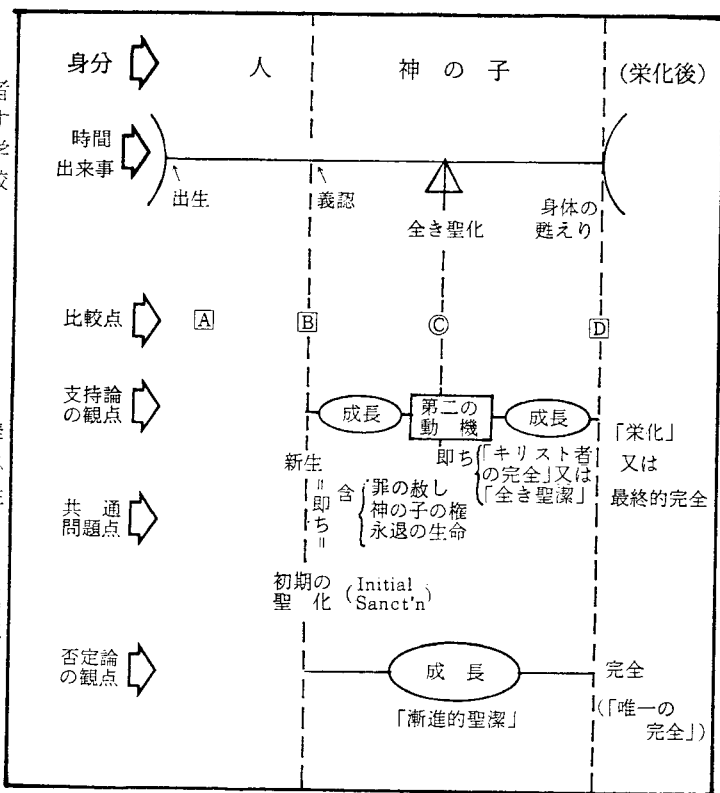
② 教理の内容に於いて。

(附) 図表-A 附記 「キリスト者の完全に関する二つの神学的観点の比較表」

1) 同意点 A, B, 及びD

2) 相違点 (イ) B-D, 又はC 「完全」の瞬時的獲得の必要性と可能性に関して

(ロ) C又はD 聖潔の消極面、即ち罪性の除去という意味に於けるすべての罪よりのきよめについて。



図表-B

	← 聖書は ! →			
	↑			
聖化	人	神		
義認	神		人	
	カルビン系	アウガステイニアン	アルミニアン系	ウェズレアン

図表-C

聖書神学への招き

{ CLUE }

「完全」について、例えば

死 ————— ロマ 6

聖化 ————— テサ I, II

愛 ————— ヨハ I

などの学びを。

II 聖書神学への招き

殆ど結論的に述べるべきがこの項の様であるが、以上、考察して来た比較点から知りうる事が三点あるように思う。

第一は、ことに相異点を見る時に、一見、両者の間には、また我らにとっても、この題目の真理を追求するには行きづまりに来たかに見える面である。

第二は、しかし、二点の明るい面が存在する事実といえよう。一つは両陣営の共有する広大な同意点の实在と、今一つは両者の共通的な自覚である「お互いが福音主義的プロテスタントである」ことを認めあっている事実である。

第三は、両者は神の言である聖書をして、ことの最終権威と認め合っており、聖書に対する態度に一致を見ることである。

以上の諸点から、筆者は、クリスチャン・ライフの神学、ことにキリスト者の完全という大切な主題に関して、聖書自体の学びに帰ること、聖書神学的アプローチをあらためてなすことを強く提唱する者である。

我ら相互が嗣業として在る在来の組織神学体系は貴いものではある。しかし図Bに示される事は一例であるが、聖書は常に健全且つ充実な内容を我らに示すからである。

さらに、聖書神学への招きを具体的に示すならば、その可能性の一つとして「完全」に関する側面を特定的に学ぶことも考えられる。その例が図表Cである。

(結)

この論文の目的はクリスチャン・ライフの神学についての在来の神学的二陣営の妥協点、中道を見出して両者を統合させようとする今一つの努力ではない。目的は、この題目が聖書の伝える福音の中心点であると納得する筆者は、故にこれが「教会」によって最重要な実際問題であることを指差すこと、また、この題目に関しての在来の理解の流れを再確認することである。と同時に、この時代に教会のバトンを受け取る者たちとして、直に、聖書の記者たちが御言を記した時に聖霊によって意味したことを厳正に捕えることによって真理を知ろうとする努力への招きの声をあげる事が目的なのである。この努力によってのみ聖書に示された、キリスト者に関する神の御旨を悟ることが出来るからである。

日本に、小さくても良い、スレヤの人々のような真摯な群が生れる事を心から願いつつ筆をおく(徒十七10、11)。

註記

1. Howard Marshall, *Kept by the Power of God*, Minneapolis, Minnesota: Bethany Fellowship Inc., 1975, p. 21.
2. Abbey and Overton, *The English Church in the Eighteenth Century*, p. 113, quoted in W. E. Sangster, *The Path to Perfection*, London: Hodder and Stoughton Limited, 1943, p. 88.
3. James Gilchrist Lawson, *Deeper Experiences of Famous Christians*, Anderson, Indiana: Warner Press Inc., 2nd. Printing, 1972, p. 141.
4. *Ibid.*, p. 142.

- 5 Harry E. Jessop, *Foundation of Doctrine in Scripture and Experience*, University Park, Iowa: Yennard College, 13th Printing, 1974, p. 159.
- 6 Good collections of such terms are found in Jessop, *Op. cit.*, pp. 4-5, also in Jack Ford, *In the Steps of John Wesley*, Kansas City, Missouri: Nazarene Publishing House, 1968, p. 232, as well as in J. A. Wood, *Perfect Love*, London: Skvatonist Publishing and Supplies, Ltd., n. d., p. 9.
- 7 John Wesley, *The Works of John Wesley*, Vol. XII, Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House, n. d., p. 394 (Henceforth, *Works*).
- 8 Roy S. Nicholson, *The Arminian Emphases*, Owosso, Michigan: Owosso College, n. d., p. 16.
- 9 Ward M. Shantz, 'John Wesley's Teaching on Christian Perfection', in Kenneth Geiger (compiler), *Insights into Holiness*, Kansas City, Missouri: Beacon Hill Press, 1963, p. 136 (Henceforth, *Insights*).
- 10 Edward H. Sugden (Editor), *Wesley's Standard Sermons*, Vol. II, London: The Epworth Press, 1956, p. 365.
- 11 Wesley, *Works*, Vol. XI, p. 406.
- 12 Quoted by George E. Failing, in 'Developments in Holiness Theology After Wesley', in Geiger (comp.), *Insights*, p. 12.
- 13 Failing, *Ibid.*, pp. 12, 13.
- 14 Wesley, *Works*, Vol. XI, p. 396.
- 15 Herbert F. Stevenson (Editor), *Keswick's Triumphant Voice*, Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House, 1963, p. 9.
- 16 Wesley, *Works*, Vol. XI, p. 444.
- 17 *Ibid.*, pp. 368-369.
- 18 *Ibid.*, p. 395.
- 19 *Ibid.*
- 20 Richard S. Taylor, *A Right Conception of Sin*, Kansas City, Missouri: Beacon Hill Press, 1945, p. 123.
- 21 John Wesley, *A Plain Account of Christian Perfection* London: The ...
- 22 See Ora D. Lovell, 'Holiness: Instantaneous and Progressive' in Kenneth Geiger (compiler), *Further Insights into Holiness*, Kansas City, Missouri: Beacon Hill Press, 1963, p. 123.
- 23 W. T. Purkiser, *Sandification and Its Synonyms*, Kansas City, Missouri: Beacon Hill Press, 1963, p. 47.
- 24 Benjamin Breckenridge Warfield, *Perfectionism* (Edited by Samuel G. Craig), Philadelphia, PA: The Presbyterian and Reformed Publishing Company, 1957, p. xi.
- 25 *Ibid.*
- 26 *Ibid.*
- 27 See J. C. Kyle, *Holiness*, London: James Clarke & Co. Ltd., 1956, p. 2.
- 28 *Ibid.*
- 29 *Ibid.*
- 30 G. C. Berkouwer, *Sin* (Tr. by Philip C. Holtrop), Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 1971, p. 289.
- 31 *Ibid.*, p. 291.
- 32 J. I. Packer, 'Perfection', in J. D. Douglas (Organizing Editor), *The New Bible Dictionary*, London: The Intersociety Fellowship, 1963, p. 967.
- 33 Kyle, *Op. cit.*, p. x.
- 34 Quoted by Sangster, *Op. cit.*, p. 85.
- 35 Kyle, *Op. cit.*, p. 85.